

※ 解答にあたっては、句読点やかぎかゝ等の記号も一字分として数えること。

- 【一】次の1～10の各文の——部のカタカナを、それぞれ漢字に改めて答えなさい。
- 1 長いコウカイから帰港する。
 - 2 教官にケイレイする。
 - 3 王座にクンリンする。
 - 4 海外ボウエキで財をなす。
 - 5 ヨウサン業がさかんだ。
 - 6 事件はメイキユウ入りした。
 - 7 人形をうまくアヤツる。
 - 8 休日はモツバラ寝ている。
 - 9 家事で夫のカブが上がる。
 - 10 罪人をサバく。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文章というものは、どこまで行っても「自分の思い」を書くものです。自分の思いのこもらない官庁の事務書類みたいなものは、だれが読んだっておもしろくない。そうですね。ところが多くの人は、自分のことを書き始めるといつい夢中になってしまつて、あああんなことがあつたなあ、こんなこともあつたなあ、あれは楽しかった、あれは嫌だった、とか非常に主観的な思いが交錯し(注・入り混じつて)、Aそれをただ無批判に書き連ねるということになります。

ここで大きく欠けているものは、「この文章を他人が読んだらどう思うだろうか」という視点です。

たとえば、だれでも自分の子供はかわいい。それはもう無条件な気持ちです。だからこんなにかわいい子供の写真を撮つて人に見せたら、人もさぞ喜んでくれるだろう、と、そう思つてしまふ人がときどきあります。それで、変り映えもしない赤ん坊の写真などを、夥しく見せられて、そう退屈そうにもできず、さもa「拝見しているふりをしつつ、その実b「しているということが、これはわりあいによくあります。文章もそれと同じです。

だれしも自分はいかぬ。なによりもかわいなのは自分だ、これは天下の真実でありましょう。したがつて、その自分の人生行路をつらつらと書き連ねたら、それはだれもおもしろく読んでもくれる「はずだ」と、こう思い込むのは、ちやうど自分の子供の写真をだれにでも見せたがる無分別な親の心に似ています。

一歩さがつて、もう一度その写真を見直してみたい。はたして、この写真は、他人が見たらおもしろいだろうか、ほんとうに人は見たがるだろうか、と「他人の立場に立つて」よくよく考えてみたら、それが結局独りよがり過ぎないということに気づくであります。これが分からない人は私の意見などにおそらくB「を貸さない人です。

同じように、自分にとつてどんなに大事な出来事であっても、どんなに強烈な印象の残る事件であつても、それが他人にとつておもしろいとは限りません。

ここでもあの世阿弥の「離見の見」ということを応用して考えてみたいのです。

はたして、自分の書いた文章は、まったく自分のことを知らない、そして自分に対してなにも興味のない赤の他人が読んだときに、なにかおもしろいと感じることが出来るだろうか、と自問してみるといいのです。今から十五年あまり前に、私が最初の著書『イギリスはおもしろい』を書いていたとき、もつとも痛切に心のなかに去来していたのは、まさにこの自問でした。

たしかに自分は、イギリスでさまざまな珍しい経験をしてきた。素晴らしい人にも出会つて、多くの親切を受けたりもした。またイギリスの食べ物やあれこれと食べて、おいしかった、まずかったといろいろの経験をしてきた。けれども、はたしてその「自分の経験」は、このハヤシノゾムという人間のことなどなにも知らない赤の他人に読ませたとき、その人のおもしろいと思つてくれる事柄だろうか……。

私は、信州の山荘にこもつて、その処女作を書きながら、いつもそう自問しては、あまりに個人的な人間関係とか、自分という人間を知つて

いる人でもなければおもしろいとは思えないような事柄とか、C「うところではできるだけ書かないように心がけました。

その結果、私はその『イギリスはおもしろい』のなかで、自分がイギリスではなにをしていたのか(事実はロンドン大学やケンブリッジ大学の図書館で、ひたすら古書を調査研究していたのですが、そんなことはほとんどの人にはなにも興味のないことにちがいないのですから)ということ、まったく書かなかつた。したがつて、ハヤシノゾムという作者がどういう人間なのかはまったく不問に付したまま、ひたすらイギリスの食べ物・料理・食習慣などについて書き続けました。

そうすれば、たとえハヤシノゾムなどという人間になんの興味もない人が読んでも、やはり珍しいイギリスの食べ物や食習慣のことについては、きつとおもしろいと思つてくれるにちがいない、そういう思いがあつたのです。

結果的に、この本は日本エッセイスト・クラブ賞をいただき、そして思いがけないベストセラーになりました。そうして、この見慣れない名前前の作者はいったいどんな男か女か、年齢はいくつくらいで、どんな仕事をしている人なのか、とまるで「謎の作者現わる!」というような評判D「え立つたことでした。

E「でも、それで良かったのだと思つています。

文章というものは、結局、自分の思い込みなどはどうでもよいことで、肝心なのは、それを読む人がどうおもしろがってくれるか、ということだからです。つまりこの『イギリスはおもしろい』が成功したのは、ひたえに作者の主観を離れて、F「世阿弥のいわゆる「離見の見」の見方を以て自分の文章を綴つていったからだろうと、私は冷静に分析しています。この最初の著書のなかで、私はイギリスの食物についてたくさんこのことを書いていますが、その文章には「感情語」とでもいうような形容詞をほとんど使っていないことに注目してください。

うれしい、かなしい、せつない、くやしい、たのしい、おもしろい、ねたましい、いやだった、とかそういうG「自分の感情をナマな言葉で書き表すことは、意識的に避けています。こういう表現というのは、非常に主観的なので、仮に、自分が「うれしかった」と感じたからとて、それをそのまま「うれしかった」と書いても、それは主観を述べたに過ぎず、読者は、いったいなにがどううれしかったのか分からない。じゃあ、非常にうれしかったのだから、と思つて、「非常に、すごーく、うれしかった」と強調して書いたとしても、やっぱり、「ああ、この人はなんだかしらないけれど、ばかにうれしかったんだねえ」という程度のそつけない感想しか、読者は持つことができません。これが文章の主観というものです。

大切なのは、そのとき仮にあなたがうれしかったとしたら、どこでどんな経験を、どういう経緯があつて、だれがどんなことを言つたりしたりして、それがどういう結果をもたらしたか、という具体的な事実を、感情を交えないで書いておかなければなりません。

それを冷静に客観的にきちんと書いておけば、読者は作者と同じ経験を文章のなかで追体験することができて、ああ、これではさぞうれしかったことだろうなあ、としみじみ思うことができる。これがつまりH「文章の説得力ということにつながるのです。

世阿弥のいう「離見の見」というのは、まさにこういう「あなたがたに」ものを見よ、という教えであつて、文章の書き方のもつとも重要な要素だと言つていいかもしれません。

なぜなら文章というものは、I「自分の思いを「他人に」伝えるためのメディア(注・情報記録・伝達手段)であつて、自分だけで感情を自得して(注・ひとりであつて)よろこぶためのものではないからです。そしてその思いが他人に十分に伝わったとき、文章ははじめてその存在理由を持ったことになるのです。

ここを、みなさんは決して忘れてはなりません。

(林望「文章の品格」による)

受験番号

問1 — 部A「それをただ無批判に書き連ねるということ」とは、どういうことですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア あんなことがあったこんなこともあったと思い出しては、楽しかった嫌だったなどと、ごく簡単な感想だけを並べること。
イ 思い出を書くのに夢中になるあまり、周りの人々の自分とは違った思いに気がつかず、自分の思いだけを書いていくこと。
ウ 自分にとっておもしろい出来事なら、他人もきつとおもしろく読んでくれると勝手に思い込んで、長々と書いていくこと。
エ 誰もが自分のことはかわいいので、都合の悪いことは他人のせいにして、自分だけは正しいという主張を書き続けること。

問2 空らん a・b に入る言葉の組み合わせとしてふさわしいものを、次のア〜エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア a なにげなく b 興奮
イ a なつかしく b 軽蔑
ウ a おとなしく b 憤慨
エ a おもしろく b 閉口

問3 — 部B「□を貸さない」の□にふさわしい言葉を、漢字一字で答えなさい。

問4 — 部C「そういうところではできるだけ書かないように」して『イギリスはおいしい』を書くことができたのは、筆者がどのようなことを確信していたからですか。本文中の言葉を使って、七十字以内で答えなさい。

問5 — 部D「さえ」と同じ用法の「さえ」を含む文を、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先週から続く長雨に、今朝は風さえ加わった。
イ あの花は変化球は、イチローでさえ打てない。
ウ 先制点さえ取れたなら、勝てたかもしれない。
エ 算数さえ分らないので、数学など無理です。

問6 — 部E「でも、それで良かったのだと思っています」とありますが、そんなふうに思えるのは、なぜですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最初は文章に対する興味しか持たなくても、いつかは作者に対しても関心を持つてくれるようになるはずだから。
イ 読者に伝えるという目的を叶えるために、自分を前面に出さないほうがいいのなら、作者にとつても本望だから。
ウ たとえくだらない思い込みにすぎないことでも、読者がおもしろがつてくれることが何よりうれしいことだから。
エ 情報をいくら与えるよりも、作品を通して深く感じてもらうことが、作者を本当に知ってもらうことになるから。

問7 — 部F「世阿弥のいわゆる『離見の見』の見方を以て」文章を綴るといふことは、何をどのように書くということなのですか。それを説明した言葉を、「書く」ということ。に続くように、本文中から二十字以内で探し、ぬき出して答えなさい。

問8 — 部G「自分の感情をナマな言葉で書き表すこと」を避けるべきなのは、なぜですか。『感情語』だけで書き表しても、という書き出しに続けて、本文中の言葉を使って、六十字以内(書き出しをのぞく)で答えなさい。

問9 — 部H「文章の説得力」とありますが、文章が説得力を持っためには、文章はまずどのような力を持たなければならないのですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読者に、作者がした経験はすばらしいと言わせる力。
イ 読者に、作者と同じ経験をしてみたいと思わせる力。
ウ 読者に、作者がした経験を事実として理解させる力。
エ 読者に、作者と同じ経験をしていると感じさせる力。
問10 — 部I「自分の思いを『他人に』伝えるため」に、必ず持ち続

けなければならぬものは、何ですか。その答えを示した言葉を、本文中から三十字以内で探し、その初めと終わりの五字をぬき出して答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。
今までの人生において、わたしはどれだけの「救い」に遭遇してきたのだろうか。

A それほど多くはない。いや、B 大部分は、たとえば通勤電車内できなり腹痛に襲われ顔を青ざめさせながら途中下車して駅のトイレに駆け込んだものの個室はどれも塞がっていた一瞬気が遠のいたけれど、半泣きの声で窮状(注・とても困っている状況)を訴えたらすぐにドアが開いて「助かった!」とか、まあそういった類のものばかりである。確かにピンチと救いとのペアにはなっているが、人生を左右するような奥行きを伴った体験とは文脈が異なる。「救い」のうちでも、ランクは低い。(中略)

電車内で急激かつ激しい便意を催そうと、そんなこととは無関係に自分にはいつもと変わらぬ人生が用意されていることをわたしは知っていた。ピンチではあつても、そのことで人生が、世界が終わりになるとは思わない。そうした点で、シリウスさ(注・深刻さ)が異なる。

自分にとってランクの高い「救い」は、せいぜい五回程度だった。(中略)それは絶望体験が五回ということでもある。絶望は数ではなくて質や時間の問題かもしれない。ずつとぬるま湯の中で生きてきたわたしには、本当の絶望なんて知るまいと誹られそうだ(注・非難されそうだ)。でもそういった不幸自慢みたいなことに興味はない。問題は救いを心の底から実感した体験である。

五回。その五回においてわたしはいちいち①悩みや苦しみが一気に解消すること。②慈愛に近い「大いなるもの」を実感すること。③C遠ざかっていた日常が、鮮明な輪郭を備えて戻ってくる。——を味わってきたのだ。これはやはり自分が祝福されているようにも思えてくる。

(中略)
木琴のエピソードである。

これは、またしてもわたしが茫洋とした(注・おおらかでのんきな)子どもであつたことに起因する。

小学校低学年の音楽の時間に、木琴演奏が重要な課題として定められていた。こちらはそんなものに興味がないので(そして小馬鹿にしていたので)、あたかも演奏している「ふり」をしてやり過ごしていた。その代わりに、宇宙の果てを探検することや殺人光線は緑色をしているベキか赤色のほうが相応しいかと、そんな想像に明け暮れていたのだ。

やがて危機が訪れた。来週の月曜に生徒ひとりずつが前に出て、順番に木琴演奏をさせられるというのである。発表会兼テストというわけだろう。D わたしは狼狽した(注・あわてふためいた)。木琴なんてまったく弾けない。弾ける「ふり」をしていただけだ。クラス全員を前にして、わたしは棒立ちになるしかない。出鱈目を演奏するような度胸はない。ましてや何も分かりませんでは済むまい。教諭は、今まで何をしていたのかと詰問する(注・問いつめる)だろう。そのときに、宇宙探検の殺人光線だのでは弁明(注・いいわけ)になるまい。さすがにその程度の現実感を持ち合わせている。わたしは窮地に追い込まれた。

クラスメイトに打ち明けて放課後の音楽室で特訓してもらうとか、そのあたりがもつともスマートな解決法だったかもしれない。だがわたしの通っていた私立の小学校は誰もが遠方から通っていた。放課後にぐずぐずしたり、気軽に友人の家に立ち寄るとかが難しかった。おまけに、そもそも「相談する」という発想がなかった。兄弟姉妹もいない。叔父(伯父)や叔母(伯母)や甥や姪や祖父母も近くにはいない。

こうなると、もはや処刑を待つ死刑囚のような気分になってくる。死刑囚なら死んでお仕舞いになるぶんメリハリが効いていそうだが、こちらは恥をかいたのみならずその後も音楽の授業は延々と続くのであ

る。生き地獄じゃないか。溜め息どころの話ではない。

頑張るとか努力するとか、それ以前の話なのだから苦しい。仮病で逃げる手も考えられるが、下手をすると翌週に自分だけあらためて演奏をさせられるかもしれない。余計に事態が悪くなる可能性が高い。

E 重苦しい気分押し潰されそうだった。解決策は思い浮かばない。なぜか反省の気持ちはほとんど生じなかった。不幸な星の下に生まれたような不条理感(注・納得のできない気持ち)に苦しみ、食欲も進まなかった。世の中のすべてが色褪せて見える。通学で乗っていた電車の窓から見える見知らぬ街へ、一目散に逃げ込み溶け込んでしまいたいと願わずにはいられなかった。

日曜日になった。明日には音楽の時間が待ち受けている。悲劇が口を開けて待ち構えているのだ。しかも朝からしとしと小雨が降っている。視界の中は無彩色に感じられる。灰色の日曜日とはまさにこのことではないか。

昼近くになって、とうとうわたしは耐えきれなくなった。父は縁側で煙草を吸いながら雑誌の『オール読物』を読んでいた(記憶の中の父は、大概、『オール読物』を読んでいる)。母は週刊誌のクロスワード・パズルを解いている。テレビはまだ我が家には登場していなかった。半泣きのわたしは、意を決して、自分の窮地について両親に打ち明けた。これは正直に申してF バンジージャンプどころではない決断が必要であつた。上手く言葉で説明しきれたかどうか。でも、木琴を明日までにマスターしなければもはやどうにもならないことは伝わったようであつた。しかもここが奇妙なところなのだが、わたしは木琴で「ド」の位置が分からなかったものの逆にそれさえ分かれば、ほんの少し練習さえすれば明日の発表をクリアできる確信があつた。どうにもバランスの取れていない話だが、事態はそんなふうになつていった。

★ それならば、もはやG するべきことは決まっているじゃないか、と父が言った。すぐに父と一緒に出掛けることになった。母が玄関から二人を送り出してくれた。電車に乗って池袋のデパートへ行き、木琴を購入するのである。傘をさした父は駅まで歩いて、黄色と茶色とに塗り分けられた電車に乗る。デパートの楽器売り場までエレベータで直行する。父が年配の店員に尋ねると、彼は何もかも心得ているかのように頷いてから、艶々とした木琴を見せてくれた。真ん中で二つに折りたためるので、意外に嵩張らない。脇に小さな穴が二つ開いていて、そこにマレット(注・ばち)の柄を差し込んで収納するようになっていた。「ド」の位置が分かるかと父が尋ねると、「手引き」が付属しているから大丈夫ですと店員が請け合う。早速購入し、せっかくだからと六階の大食堂でオムライスか何かを食べた。

帰路の電車の中でわたしは「ああ、救われた」と思った。心の底から思った。これでどうにかなる。悩みは解消に至った。電車の窓を小雨の水滴が斜めに流れ落ちていくところや、灰色に煙るビル群の架線を支える鉄柱とともに横へ走り去っていくのが、まさに安堵(注・安心)に満ちた光景として胸に染み入ってきた。

午後は茶の間で即席の練習を行い、要領が良いのか悪いのか、ともかくわたしは翌日の発表会兼テストを無事乗り切ったのだ。そしてそのまま木琴は押し入れ行きとなり、その点ではもったいないことになった。わたしがこのエピソードを機に木琴演奏に目覚め、やがてゲイリー・パートンやミルト・ジャクソン(注・ともに米国の著名な木琴奏者)みたいになったのならちよつとした感動秘話になつたであろうが。

(春日武彦『鬱屈精神科医、占いにすがる』による)

問1 部A「それほど多くはない」と言えるのは、筆者が心の底から「救い」だと実感した体験が、どのような体験だったからですか。その答えを示した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から十五字以内で探し、ぬき出して答えなさい。

絶望的な「 」という思いから救われた体験。

問2 部B「大部分は」という言葉は、本文中のどの言葉にかかっ

ていますか。部Bを受ける言葉としてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 駆け込んだものの イ 窮状を訴えたら

ウ 「助かった！」 エ ものばかりである

問3 部C「遠ざかっていた日常が、鮮明な輪郭を備えて戻ってくる」とよつてもたらされるのは、どのような感覚ですか。その感覚を示した一文を、本文の「木琴のエピソード」の中から探し、その初めの七字をぬき出して答えなさい。

問4 部D「わたしは狼狽した」とありますが、筆者が狼狽したのはなぜですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼんやりと毎日を過ごしてきたところ、テストをされることになつて初めて、木琴なんてまったく弾けないという現実に気づかされたから。

イ 木琴なんて弾けなくても、自分にとっては関係がないと思つていたのに、もし弾けなければ死ぬほどの恥をかくことになるわかつたから。

ウ 小馬鹿にしていた教諭がまさか、発表会兼テストなどという逃げられないやり方で自分を窮地に追い込もうとは、夢にも思わなかったから。

エ 人に相談した経験がないのに、クラスメイトに木琴の特訓をしてもらわなければならなくなつて、どうお願いしようかと途方に暮れたから。

問5 部E「重苦しい気分」の内容として、あてはまらないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 事態が悪化し方へと進んでいく想像しかなかった。

イ このことは遠くどこかの場所へ逃げてしまいたい。

ウ しつかりと現実と目を向けて生きるべきだった。

エ あたり前だった日常が自分から遠ざかっていく。

問6 部F「バンジージャンプ」どころではない決断が必要であつた」のは、窮地を打ち明けると、両親に何を説明しなければならなくなるという思いがあつたからですか。「何」にあたる言葉を、本文中の言葉を使って、六十字以内で答えなさい。

問7 部G「するべきこと」とは、どうすることですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

問8 後ろから三つめの「(それならば)からはじまる」★印の段落全体の表現の説明としてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 感情を交えずに、出来事だけを淡々と書き連ねていくことによつて、絶望的だったはずの苦しみ、あつけなく解消されていく様子を表そうとしている。

イ 苦しみが解決されるまでの一部始終を正確に記録しておくことによつて、この苦いエピソードを、忘れてはならない教訓として心に刻み込もうとしている。

ウ 主語を父親に切り替えて、自分の存在を消していくことによつて、苦しんでいるわりには結局は人まかせにしてしまう、自身ののんきさを省みようとしている。

エ デパート売り場に到着するまでの過程や父親と店員との会話をテンポよく描くことで、苦しいと思つていたことが実は何でもなかったのだと言おうとしている。

問9 本文の「木琴のエピソード」において筆者は、筆者のいう「大いなるもの」を、何に対して実感したのですか。五字以内で答えなさい。

【一】

6	1
7	2
8	3
9	4
10	5

【二】

問 1	問 2	問 3

問 4	問 5	問 6	問 7

書くところを。

問 8 「感情語」だけで書き表しても、

問 9	問 10

【三】

問 1	問 2

問 3	問 4	問 5

問 6	問 7	問 8	問 9

右のらんには
何も書かない
こと

I	H	G	F	E	D	C	B	A

受 験 番 号